

伊良湖岬行 ～その1 「椰子の実」～

同窓会会員：石橋正彦

投稿日：2018年10月20日

愛知県田原市にある太平洋と三河湾を望む渥美半島先端にある伊良湖岬（いらごみさき）に、行って来た。旅の目的は、以前より念願であった「椰子の実」の曲碑を見ること、そして鷹柱を見ること、であった。ここでは、「椰子の実」の曲碑について記す。

「椰子の実」とは、島崎藤村作詞、大中寅二作曲のNHK 国民歌謡として知られている、あの有名な歌のことである。歌詞は柳田國男（「遠野物語」で知られる民俗学の先駆者とされるが、岩手県遠野地方の土淵村出身の佐々木喜善が苦勞して収集した民話を筆記、編纂して、あたかも自分が苦勞して集めたかのように柳田國男単名で出版したので、こと「遠野物語」に関しては、非常に怪しからん学者であると考えているが、そのことはまた改めて論ずる）が伊良湖岬に滞在した折に浜辺に打ち上げられていたココヤシの実を見て、そのことを親友の島崎藤村に話したところ、藤村がああ「椰子の実」の詩を作ったとされている。

伊良湖岬には藤村の詩碑（1961年建立、山側にあつて、周りの草に半分覆われて日陰になっていた）もあるが、私がとくに見たかったのは曲碑の方である。作曲者大中寅二は東京赤坂にある霊南坂教会のオルガニストで、作曲家としても「椰子の実」の他に沢山の曲が残されている。私の両親は霊南坂教会で、長く日曜学校の教師をしていたこともあつて、大中先生（両親は寅さんと呼んでいた）は古くからの友人で、両親の結婚式の際には「祝婚歌」をわざわざ作曲して下さった。大中先生のご令息、大中恩（めぐみ、「さっちゃん」「犬のおまわりさん」などの童謡で有名。今も94歳の現役作曲者、指揮者として活躍されている）、隅谷三喜男（経済学者、元東京女子大学学長）などの方々は日曜学校での私の両親の教え子で、大中先生共々両親の新婚家庭にいつもカレーライスなどを食べに来ていた常連だったそうである。



大中寅二生誕 100 年を記念して既に作られていた藤村の詩碑のすぐそばに 1996 年に写真に見られるような作曲の記念碑が海を背景に作られ、裏面には香代夫人が書かれた大中先生に関する解説が刻まれている。

この曲碑が作られた際には、香代夫人から私の母宛に建立記念のセレモニーの案内状が送られていた。母が亡くなったおりに遺品整理をしていたら、大切に保存していた案内状と香代夫人からの手紙が出てきたので、いつかその碑を見に行きたいものと願っていたのが今回実現したのであった。碑は前日の台風のせいで木の葉やごみが張り付いていた。近くにあった木の枝を使って表面を掃除して写真を撮ったが、快晴無風の伊良湖岬先端で海を背景に輝いているようであった。誰もいなかったので、思いっきり「椰子の実」を海に向かって歌ってきたが、気分爽快であった。母が存命であったなら、記念碑を見てきたことをさぞ喜んでくれたであろうと思った次第である。

伊良湖岬行 ～その2. 鷹柱～

前稿に引き続き、伊良湖岬行きの目的の一つである鷹柱観察について記す。

鷹の仲間の多くは春に南方から日本に渡ってきて繁殖をするが、秋に帰る際には十数羽から多い時には数千羽の群れになって旋回しながら上昇し、やがて気流に乗って南の方向に飛んでいく。この上昇気流に乗って群れで上昇する様子が柱の様、ということで鷹柱という。秋の渡りでは大きな群れを作り、各地で鷹柱を見ることが出来るが、春に戻ってくる渡りでは大きな群れを作っても、日本の本土では渡りの終点ということもあって鷹柱を見ることはない。鷹柱の観察地としてとくに伊良湖岬は有名で「タカの渡り全国ネットワーク」というワシタカ類わたり調査研究グループが、伊良湖岬の恋路ヶ浜で毎年定点観測しているが、私が行った10月2・3日は台風が通過した直後ということもあって、サシバが2日は895、3日は2,641、ハチクマが2日98、3日52、ノスリが2日33、3日71羽それぞれ観察出来たと報告している。他にこの両日に観察されているのはハヤブサ、オオタカ、ハイタカ、チョウゲンボウ、ツミ、チゴハヤブサ、ミサゴなどで、種類、数とも大変多く、9月18日から10月11日までの観察報告の総数6,388羽中10月3日だけで、2,786羽が観察出来たとされているので、偶然ながら私は最高の鳥実日和の日に行ったことになる。といっても、その全部を私が見ることが出来たわけではない。私が見たのは1回に100羽以上が群舞していたのが1回だけで、あとは10数羽から数10羽が次から次へと旋回しながら上昇していったが、結局1,000羽以上の主としてサシバの群れを見ることが出来たわけで、鳥見としては大満足の成果であった。



伊良湖岬の鷹柱は江戸時代から知られていたようで、留まった民宿のそばには「鷹一羽 見つけてうれし 伊良湖崎」という芭蕉の句碑があった。この時、芭蕉は鷹柱を見ることを期待していたのであろうが、果たして鷹柱を見ることが出来たのだろうか。因みに「鷹柱」「鷹わたり」は秋の季語である。

鷹が南方に帰るのは9月半ば頃からで、始めはハチクマなどが主体となり、9月下旬から10月上旬は主としてサシバやノスリのような中型の鷹、そして10月半ばからは小型のツミなどが増える傾向があるようだ。数から言えば、伊良湖岬で見られるのは圧倒的にサシバ多いと言ってよいだろう。写真でもわかるように、きれいな鷹である。



サシバの成鳥

サシバ達は伊良湖岬を通過した後、佐多岬に一旦終結し、さらに徳之島、宮古群島や沖縄本島、台湾の満州郷、フィリピンのバタン諸島などで休息しながら渡り続け、最終的にフィリピン、インドネシアで越冬し、一部はオーストラリアまでも行くそうである。サシバは越冬地、繁殖地の開発が進んできていることから数が減ってきており、IUCN Red Listでは絶滅危惧種Ⅱ類（VU）に分類されている。



ハチクマ

ハチクマもサシバ程ではないが、ここではよく見られる鷹である。蜂を好んで食べることで知られており、凶暴で、人をも刺し殺すとされるオオスズメバチの巣を襲ったり、ハチの子を賞味するクロスズメバチの土中の巣を襲って食べたりする。当然襲われるスズメバチ達も鷹に反撃するのだが、このハチクマだけは平然と巣を壊して食べ続ける。蜂に抵抗させる力を失わせるフェロモンを出すという説もあるが、まだその何故？は解明されていないらしい。

私が行ったときは、台風がまだ本州東北部にあったが、伊良湖岬は快晴微風で、絶好の鳥見日和であった。通常鷹柱を観察する人達は恋路ヶ浜という海岸の広場で見上げるのだが、私は小高い丘の上にあるホテルの屋上（屋上に行く許可を求めたところ、無料でどうぞ、ということで、ほとんど一日そこで過ごした）で観察。ここは鷹を上から見ることも出来る、絶好の観察ポイントで、来年はここに泊まり、もっとゆっくり見たいと思っている。ホテルの屋上はかなり高所なので、観察していると、どこからともなく湧いてくるように数羽ずつ現れ、やがて10数羽から100羽を超える群れが頭上に飛んで行き、旋回しながら上昇気流に乗って高みに登って行く。そしてある程度の高さまで行くとそれぞれ西の鳥羽の方向に飛んで行き、姿を消す。普段野鳥観察するときワシ・タカ類を見ることはトビを除けばせいぜい良くてオオタカかノスリ、あるいはハヤブサを1羽か2羽。それでも見ることが出来れば御の字で、先ず見ることはない。それが、目の前に100羽以上も、というのだから鷹柱のシーズンになると鷹だけでなく、大きなレンズを付けたカメラを抱えた人も群れる訳である。伊良湖岬では10月下旬頃はツミなどの小型の鷹が多くなるとのことであったが、2か月近く鷹を見ることが出来るようだ。愛知県には知多半島もあり、先端の富具岬あたりでも鷹柱が観察できるとのことであるが、その数は伊良湖岬ほどは集まらないようで、鷹にとって決まったコースがあるのか、あるいは上昇気流の発生状況に差があるのか、調べたら面白そうだが、どうやればよいのか。



ノスリ

私が泊まった民宿に毎年鷹見に来るといふ青年がいて、一緒にホテルの屋上に行ったが、高価そうなカメラで次々にシャッターを切っていた。今回ここに示した4枚の写真も、実は私が撮ったものではなく、知り合いになったその若い友人が撮った写真をプレゼントして下さったもので、ご了解を得て、鷹柱と鷹の素晴らしさを少しお見せする。私の持っているカメラではとてもこのように撮れない。ということで、終活で物を整理している最中であるにも拘わらず、改めて良いカメラが欲しくなった次第である。

鷹だけでなく、ヒヨドリ、ツバメなども群れで渡っていくようで、かなりの数を見ることが出来た。ヒヨドリは普段家の周囲に一年中いて柿の実を食べたり、センリョウ・マンリョウの実を食べてしまったりしているが、渡りをするグループもいるようで、伊良湖岬でも群れで高いところを飛んでいたかと思うと急降下して海面すれすれを飛んで行ったりする様子はなかなか見ものである。

さらに、鳥だけでなく、タテハチョウの仲間のアサギマダラ（浅葱斑）も群れではなかったが、次々と沢山飛んでいた。この蝶は長距離を移動することが知られており、捕まえて翅の透明部分にマーキングして放蝶する方法で移動について各地で調査研究しているが、伊良湖岬で見た個体も鷹と同様に南方に行こうとしていたのか、興味あることだった。

鳥見愛好家としては伊良湖岬で見た鷹の群れは帰宅してしばらくしても、まだ興奮させる素晴らしい光景であった。私は現役時代に大学の野鳥研（NHKの紅白歌合戦という年末番組で今もカウントしている）というサークルの顧問を仰せつかって学生達と付き合っていて、いろいろと鳥について教えてもらったが、今でもOB/OGだけでなく、現役の若い学生諸君とも鳥見を通じて交流が続いている。この鷹柱を見に行ったことを話したら大いに羨ましがっており、自慢して若返らせてもらっている。